



佐藤 一幸さん(古間)
さとう・かずゆき



やさしい笑顔の保育士さん。スイミングクラブ「ドルフィンズ」のコーチもしている

断りきれなく入団 でも、今は楽しく活動しています

現在、信濃町では448名の消防団員がいる。皆、それぞれ本業をもちながらの活動だ。現役の消防団員に話を伺った。

第3分団の佐藤さんの職業は保育士。昔風に言えば保父さんだ。

「近所の消防団の方から入団を誘われて、断りきれなかったというのが本音です(笑)。」

入団2年目の佐藤さん。お父さんも消防団経験者。「消防団は知っていたけど、どんなことをしているかはほとんど知らなかった。

た。入団して1年が経ち、こんなことまでやるんだ、という感想です。」と語る佐藤さん。勤務先が長野市ということもあり、緊急時にはすぐに、駆けつけることが難しい。佐藤さんのように就業地が町外にある消防団員は多い。とはいえ、佐藤さんは消防でもっといろいろな経験を積んでみたいですね。」と、消防団活動に意欲的だ。

第1分団副分団長の佐藤まさんの職業はホテルマン。ホテルタングラムのフロント係だ。職

信濃町の人口は約10000人
消防団は448人だ。
4.5%の現役団員はみなそれぞれの思いで、消防団に入っている

それぞれの思い

場の方にも消防団活動に理解をもちつつあるが、勤務中の出勤はなかなか難しいのが現実だ。24時間体制のフロント業務は、勤務もシフト制で「どうしても出られない時もあります。」と語る。

しかし、出られるときは、率先して活動に参加する。「みんなそれぞれ仕事を持っていて、家庭もあるし、出られないときだってあります。それは、お互い様で、他の人が出られないときは私が出るし、私が出られないときは他の人をお願いします。」

そんな佐藤さんが新人団員

の勧誘が悩みだ。昔は、地域に住んでいてそれなりの年齢になれば消防団に入るのが当たり前だったという。

近年は、地域のつながりも変化しているのか「なかなか入団してもらえないんです。昔ながらの『消防』らしい」のような消防団のイメージがあるのかもしれないですね。でも今はそんなことはないんですよ。ぜひ一度来てもらいたい。やりがいのある活動だつて理解してもらえたらと思います。」

仲間同士支え合いながらの 消防団活動はやりがいがある



佐藤 圭さん(熊坂)
さとう・けい



職場では、ホテルマンとしてお客様に真心のごもったサービスを提供する

た。兄弟での活動について何うと、「兄弟だからって意識はまったく手不足ですから(笑)。地域に僱んでいるのであれば、絶対に消防に入った方が良くないと思います。」と準郎さんがいうと、靖浩さんも「消防に入つて地域の1員になれたかなって、感じています」と語る。

地域住民で組織されている消防団。その良さを身をもって実感しているのが第2分団の多羅尾さん。5年前にご夫婦で信濃町にIターン。大家さんから「消

防に入つてみれば。知り合いが増えるよ。」と言われたのが入団のきっかけ。信濃町では当たり前。消防団だが、都会にいたころはまったく知らない存在だったという。「ほんとすぐに、知り合いが増えました。みんな良い人ばかりなので、大変楽しく活動しています。」と消防団活動に意欲的だ。「Iターンの方で地域に溶け込んでいきたいと思う人っていると思うんです。ただ、その方法がよくわからない。消防団は、地域に溶け込むのにもっとも近道だと思いますね。」

消防団に入つて 地域の1員になれたと 感じる



竹内 準郎さん(大井)
たけうち・としお

竹内 靖浩さん(大井)
たけうち・やすひろ

兄弟だからという 意識はない

防団に入れば良いと言われていたらしい。現在は、兄弟で消防団という方も増えてきた。

次にご紹介するのは、竹内準郎さんと靖浩さん。兄弟で第4分団に所属している。「消防に入った方が絶対良いぞ、と私が勧誘しました(笑)。」と兄の準郎さんは言う。準郎さんは飯綱病院の化学療法師、弟の靖浩さんは、ご家族で経営している宅幼老所を手伝っている。地区の祭などに参加はしていたが、「近所で火事が起きた時にすぐに駆けつけたいですから。」と入団し

消防団に入つて 仲間がたくさんできました



多羅尾 光則さん(柏原)
たらお・みつのり



ご夫婦で独立型居宅介護支援事業所を運営

国籍なんて関係ない 地域に住んでいれば信濃町の人



Jon McGovern
さん(熊坂)
ジョン・マクガバン



奥様と2人のお子さんとの4人家族のジョンさんのお仕事は翻訳業

その一方で、従来の枠にとらわれない入団者がある。

まずご紹介するのは、ジョン・マクガバンさん。第1分団に所属し、外国籍の消防団員は信濃町でただ一人で、全国的にも珍しい。消防団はその生い立ちから、極めて日本的な存在だ。また、団への入団は勧誘という形が一般的。「日本のみなさんは、外国人に遠慮されている。」と、ジョンさんはいう。「地域に住んでいれば信濃町の人。国籍なんて関係ない。地域の役に立ちたいと思っている外国人だつてたくさんいる。」

さんいると思いますよ。」と。ボランティア大会にも出場したジョンさん。「地域のみなさんには自分がお世話になっていきます。消防団活動を通じて恩返ししたいし、信濃町に貢献できたらハッピーです。」

今回の取材で写真を撮る時に、たまたま通りかかった近所の方から「ジョンさん、カッコいい」と声を掛けられていた。すっかり地域の1員だ。

昔は「働き手が消防にとられでは困る」と、一家で一人が消